歴史学専攻（博士後期課程）の 3 つのポリシー

【教育の理念】

歴史学専攻は、幅広い視野に立って精深な学識を授け、専門分野における研究能力または専門性を要する職業等に必要な高度な能力を養成するとともに、専門知識を社会に発信しつつ、絶えざる自己形成と社会の発展に寄与する人材の育成を行うことを教育の理念とする。

博士後期課程では、修士課程における研究成果を基礎として、日本史学・東洋史学・西洋史学・考古学の各分野におけるより高度で専門的な研究能力を身につけ、また、研究者として自立でき、国内外において歴史学研究の先端を担い、大学・研究機関における研究者・教育者、指導者として、十分に教育・研究の職務を果たし得る人材の養成を目的とする。

【修了認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）】

歴史学専攻博士後期課程は、教育の理念に基づいて定められた下記の 3 つの能力を身につけ、所定の期間在学し、「教育課程の編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）」に沿った開講科目を 12 単位以上修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、完成度が高く独創的で、学界の水準に達した博士論文を提出して、その審査および最終試験に合格した院生に対して修了を認定し、博士（歴史学）の学位を授与する。

(DP1) 高度な専門分野の知識や技能の活用力

歴史学分野に関する高度な学識と、幅広い知見を身につけている。また、それらを総合的に活用する汎用性を発揮し、専門分野における先導者として、歴史学の学問領域を中心に、広く社会に向けて新たな知見や価値を創造・提案し、還元していくことができる。

(DP2) 情報分析、課題設定および問題解決能力

自立した研究者として、独創的な観点から課題を設定し、専門的な学識や技能を用いながら継続的な研究遂行と研究結果の蓄積・収れんを行うことができる。また、最先端のツールや手法を駆使し、専門情報を収集するだけでなく、それらの分析によって、今までにない知見を導き出すことのできる高度な判断力を有する。

(DP3) コミュニケーション能力

学術論文執筆や学会発表などを通じて、自らの独創的な研究結果や新たな知見を国内外の学界に発信すると同時に、他者の考えと価値観を尊重しつつ、専門的な知見から論理的に意見を述べるなど、主体的に協働することができる。また、研究倫理を踏まえ、適切な方法やツールを用いて自らの研究業績を発信し、自ら導き出した新知見の社会的な活用や定着を模索することができる。

【教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）】

歴史学専攻博士後期課程では、「修了認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」に掲げた３つの能力を養成するために、日本史学・東洋史学・西洋史学・考古学の学問分野・領域の特性に応じた３年の教育課程を提供する。そして、各「特殊研究」の科目や各教員の「研究指導」を通じて自らの研究計画を作り、博士論文執筆の構想を練っていく。研究発表や学術誌への投稿を行いながら研鑽を積み、高度で独創的な博士論文の完成を目指す。

また、課程を通じた研究の成果として提出される、博士論文の審査基準を明確にし、博士論文の評価結果を基に、学位を授与された者がさらなる研究の向上・進展を図ることができるように指導を行う。同時に、歴史学専攻博士後期課程のリサーチワークのあり方や社会的責任について改善を図る。

さらに、情報化社会の無限に溢れる情報から論文盗用等が行われないよう、カリキュラムの全ての要素の中で研究倫理に関する意識の醸成を図る。

教育内容、教育方法、評価については下記に定める内容に従う。

1. 教育内容

1）講義科目は、豊かな専門知識と研究能力のさらなる向上を目的として、文献講読、研究史の整理、先行研究の批判的検討、史資料の収集・解釈・分析、論文作成等に関わる教授と指導を行う。

2）研究指導科目は、専門領域・研究課題に応じて、博士論文作成上必要とされる指導や議論を繰り返すことにより、緻密な研究指導を行う。

2. 教育方法

1）講義科目では、豊かな専門知識と発展的な研究能力を深化させ、少人数での個別・グループ形式で授業を行う。

2）研究指導では、課題設定の独創性、研究計画の妥当性や実現性について客観的に評価・助言し、学術論文作成や学会発表の指導を行い、博士論文作成に向けての研究業績を積み上げさせる。

3）研究指導を中心とする博士論文の作成指導においては、教員と学生の間で「提出要件」、「学位授与の方針」および「学位論文審査基準」を共有し、密接なコミュニケーションを取りながら実施する。

4）講義科目と研究指導科目は単独のものではなく、有機的な関連をもって各学生の研究活動を支える。

5）博士論文の提出については、指導教員が進捗状況だけでなく、歴史学専攻で定める「提出要件」を満たしていることを確認する。提出された博士論文の審査にあっては、主査１名と副査２名以上で構成される審査委員により「学位論文審査基準」に則り厳格な審査がなされる。最終試験においては、「学位授与の方針」に基づき、学位授与に必要とされる専門的な学識、技能、研究能力、語学力を身につけていることを詳細に確認する。

6）研究倫理教育は、研究科・専攻に拠らない一般的な内容についてはｅラーニングなどの方法を用いて広く提供し、歴史学分野特有の研究倫理については、研究者として自立して研究を遂行できるよう、研究指導を通じて補完する。

7）学生調査・アンケート等の結果に基づく客観的な評価指標によって全学的な検証を行い、検証結果を教育内容や教育方法の改善へ積極的に活用し、学生へのフィードバックを行う。

3. 評価

博士後期課程では、修了認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）、教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）、入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）の 3 つのポリシーに基づき、学生の入学時から修了後までの成長を視野に入れ、研究計画書の内容、学会発表数、論文投稿数などを考慮しながら学修成果の評価・測定を行う。

4. 修了認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と教育課程の編成・実施のマトリクス表

◎:特に重点を置いている　○:重点を置いている

授業科目等	履修単位	配当学年	DP1	DP2	DP3	各科目等のねらい
講義科目	4	1～3	◎	○	○	専門分野の高度な知識および史資料の収集･解釈･分析などの研究活動上必要な研究手段･方法についてさらに深化させる。
研究指導	―	1～3	◎	◎	○	個別の研究テーマに基づき、指導教員との密接なコミュニケーションを取り、発表や議論を繰り返し、学術論文の作成および学会発表等を通じて、最終的に博士論文にまとめる。
博士論文	―	―	◎	◎	◎	研究の集大成として、自ら設定した研究テーマに基づき、完成度が高く独創的で、学界の研究水準に達した論文を作成する。
研究倫理教育	―	1	○	○	◎	研究者として求められる基本的な研究倫理を身につけ、意識して史資料調査や研究活動を行う。

【入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）】

歴史学専攻博士後期課程は、修士課程において日本史学・東洋史学・西洋史学・考古学の各分野で専門的な研究能力を身につけたことで、研究目的をさらに明確化し、高度な研究能力を養い、国内外での大学・研究機関において教育者・研究者を目指したいと考える人材を受け入れる。また、入学希望者に対しては、歴史学分野において、広い視野と精深な学識を授け、先導者として個人の様々な能力および高度な専門知識を社会に発信する意欲を持った人材の育成を行うとする、歴史学専攻の教育の理念を理解した上で出願することが望まれる。

こうした理解を持った受験生を適正かつ公正に選抜するため、歴史学専攻の特性に応じた、多面的・総合的な視点による入学者選抜を行う。

1. 求める学生像

（AP1）歴史学分野に関わる知識や技能を幅広く修得し、大学院での学修に必要な基礎学力を有している。〔知識、理解、技能〕

（AP2）歴史学専攻で修得した専門的知識や技能、研究成果を社会に還元し、貢献しようとする強い意欲と目的意識を持つ。〔意欲、関心、態度〕

（AP3）社会全般の事象について主体的に課題を設定し、様々な情報に基づき考察を行い、独創的な論理を展開しながらも、その結果を他者にわかりやすく根拠をもって示すことができる。〔思考力、判断力、表現力〕

（AP4）多様な他者の考えや価値観を尊重して協働しつつ、自らの研究業績を適切なツールを用いて発信する意欲を持つ。〔主体性、多様性、協働性〕

2. 求める学生像と入学者選抜方法のマトリクス表

◎：特に重点を置いている　○：重点を置いている

入学試験制度	選抜方法	AP1	AP2	AP3	AP4	各入学試験制度のねらい
一般入学試験	出願書類	○	◎	◎		出願書類には、修士論文の要旨（800 字以内）が必要となる。そして、修士課程レベルの基礎的な専門知識があると認められる者に対し、研究に必要な専門知識や語学力を重視した選抜を行う。筆記試験は記述式で行い、専門科目試験（歴史学一般）、外国語試験（英語）、外国語選択試験（史料解読、独語、仏語、中国語、資料分析）の3科目で実施される。面接試験では、博士後期課程志望の動機、修了後の進路希望、専門知識と研究意欲の確認等を行う。
	筆記試験	◎		○	○	
	面接試験	◎	◎	○	○	
社会人特別入学試験	実施していない					
外国人留学生入学試験	実施していない					